みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Means of Transportation in the Central Highland, Irian Jaya

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石毛, 直道 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004640

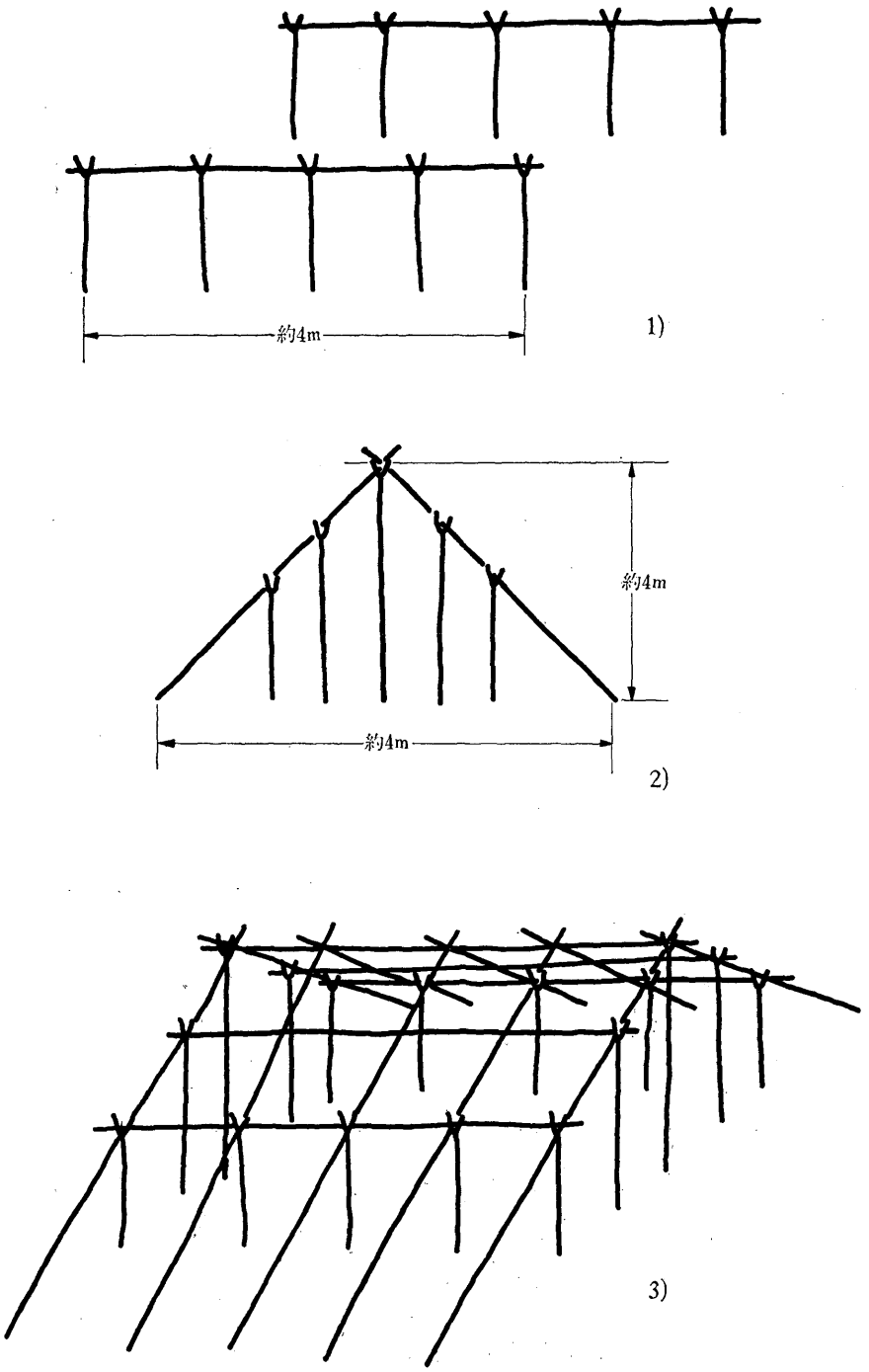


図3　Kapauku 族の野営用小屋，型式A

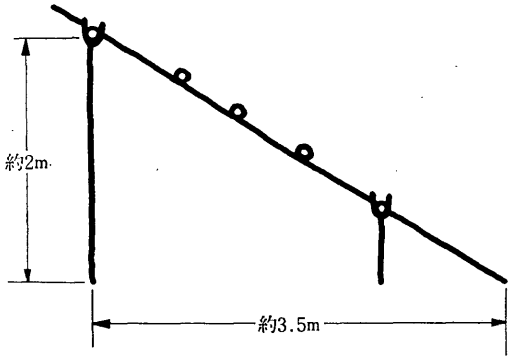
までの高さは約１m。柱列間の間隔は約２m。

ついで，２列の柱列の中間にあたる位置の両端に直径 10cm 程度の長いY字状の柱を立て棟持柱とし，その上に直径10 cm 程度の横木を渡して，横木とする。地表から横木までの高さは約２m（図３-２）。

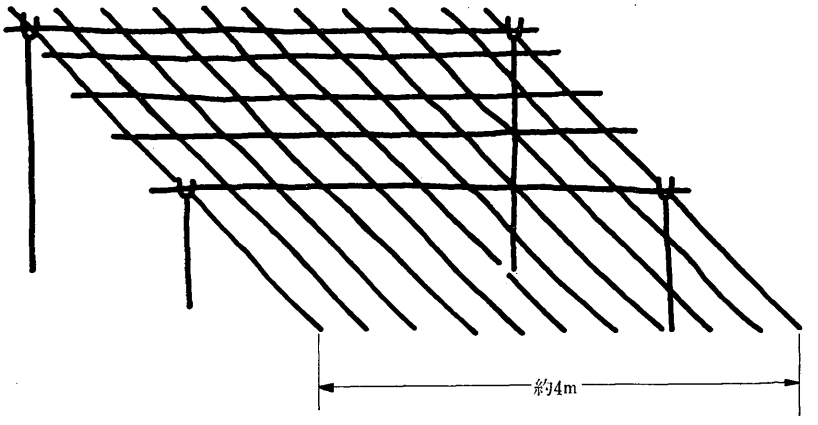
棟持柱と，はじめの柱列の中間の位置にY字状のやや長い柱を立てて，横木を渡す。この柱は屋根の両端となる部分に１本ずつ立てる（図３-３）。

次の工程として，直径５cm 程度の木を５本棟木から地表にむけて斜におろし，垂木の役をさせる。こうしてできた小屋組の木の交点を籐でしっかり結びつけて，構造部分が完成する。

型式B は，片流れの屋根をしたより簡単な小屋である。この小屋組の方法は図４-１,２ を参照されたい。



1)



2)

図４　Kapauku 族の野営用小屋，型式B

こうしてできた骨組の上に，屋根をふく。まず，直径30cm 程度のコナラ属などの木を倒して鉄斧で刻み目を入れて，はぎ取った幅90cm 前後の樹皮を垂木の方向にならべる。樹皮がそり返らないように，横木をわたして，要所を垂木とむすびつけて，はさんでしまう。その上に幅20cm，長さ6mほどのパンダナスの葉を集めて，垂木の方向にのせる。さらに葉の多い木の小枝を分厚く重ねて置き，

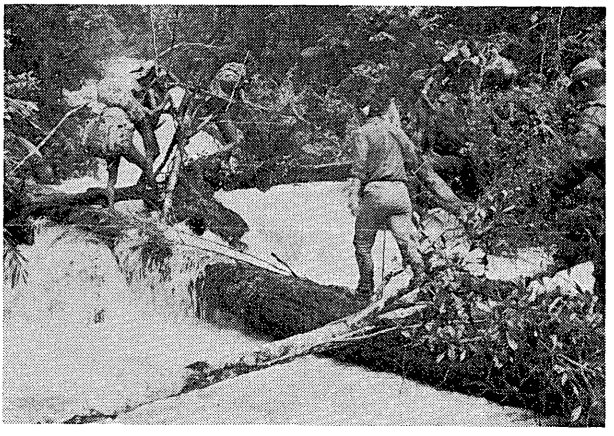


写真7　Kemabu 川上流の丸木橋
渡っているのは探検隊員とポーター

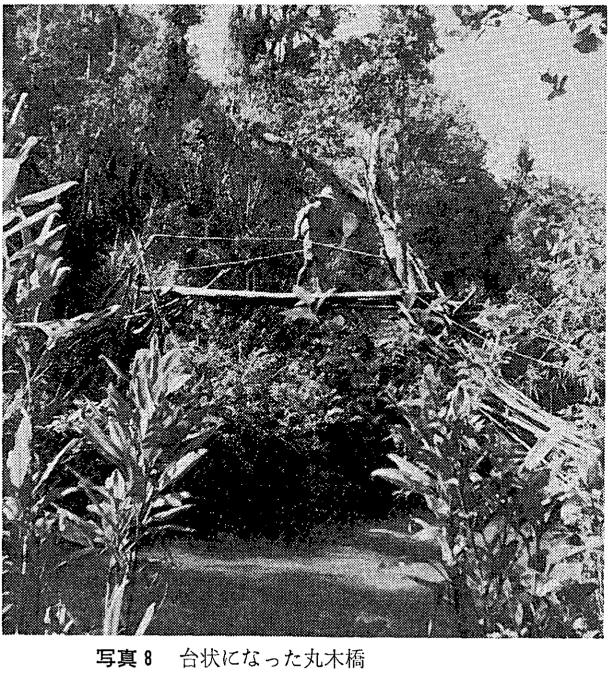


写真8　台状になった丸木橋
Kemabu 川中流，Moni 族がかけたもの

屋根ふきは終る。

開口部には，葉つきの木の枝を立てかけて，風よけとする。小屋のなかの地表には，葉つきの木の枝を何重にも敷きつめて，クッションとする。入口の近くで炊事用，採暖用の火を燃やすが，特別に炉の設備をもうけることはないようである。

型式Aの小屋をつくるのに，木を切り倒すところから，完成するまで，6人で1時間ほどで完成した。型式Aの小屋では8人が寝た。

3）橋

山岳地帯のただなかであるために，いたるところに急流があり，また年間を通じて，毎日のように降雨があるので平坦な低地は湿地帯となっている。泥深い湿地を横切るときには，丸太を泥の上に何本も置いて，丸太づたいに歩くような施設がもうけられていることもある。腰よりも浅い水深の川は，橋をかけることをせず徒渉するのがふつうである。

橋には，丸木橋と籐製の吊り橋の2種類がある。

写真9　丸木橋と吊橋の中間型式
Kemabu川上流，Moni族がかけたもの

Kapauku 語で丸木橋は koto, Moni 語で bokija とよぶ。

丸木橋には，川を横断するような形で横たわる自然の倒木のある場所へ出るように道がつけられたもの，川中に露出した岩と岩のあいだに丸太を渡したもの，川幅が狭い場合は，両岸のあいだに丸太を渡しただけのもの，などがある。ほか

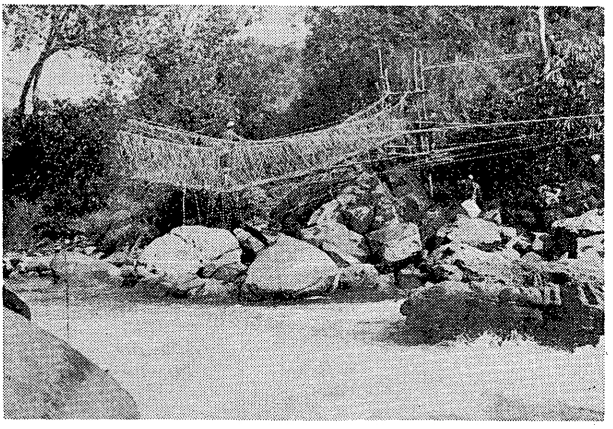


写真10　Kemabu 川中流に Moni 族がかけた吊橋

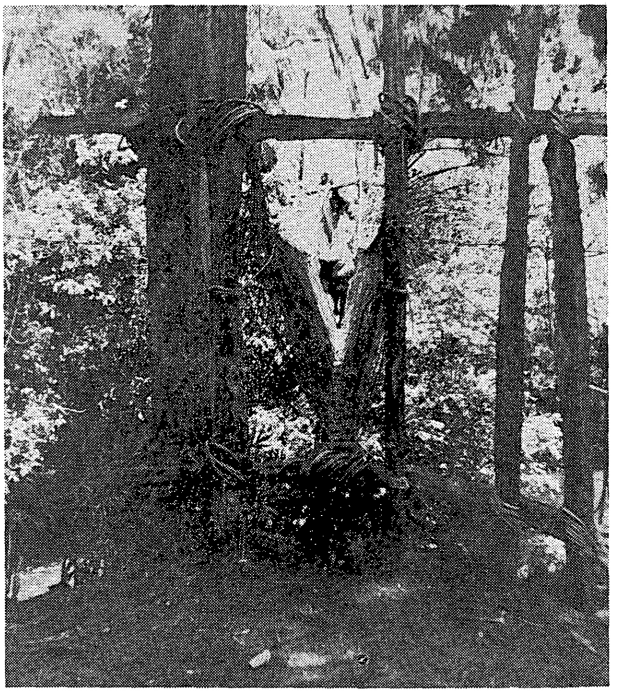


写真11　Western Dani 族がかけた吊橋
Kemabu 川上流，Ugimba 部落付近

に，技術的にもっとも高度なものとしては，川の両岸に高さ数mの支柱を組立て台とし，台部の間に丸木橋を渡したものがある。写真8は両岸の木立を利用して台部をつくり，その間に丸木を渡したもの。橋の上に籐を張って命綱としている。台部にあがるために，丸木を籐で束ねてつくった登り口がもうけられている。

吊橋はKapauku 語で go, Moni 語で kija という（kija とは 吊橋の意味ではなく橋の一般名称である可能性がある。さきにあげた bokija という丸木橋の名称のうち bo とは丸太をあらわす言葉である）。

吊橋は丸太ではとどかない，川幅の広い部分にかけられ，長さ 40 m に達するものもある。荷重をささえるために，橋の支点としては，しっかりした自然の立木を利用する。2本並んだ立木のあいだに上，下の横木をしばりつけて，井桁状の枠を両岸にもうける。下の横木の中央から両岸のあいだに張った籐が足をのせる部分，上の横木の左右から両岸に張った籐が手がかりとなる。両岸のあいだに

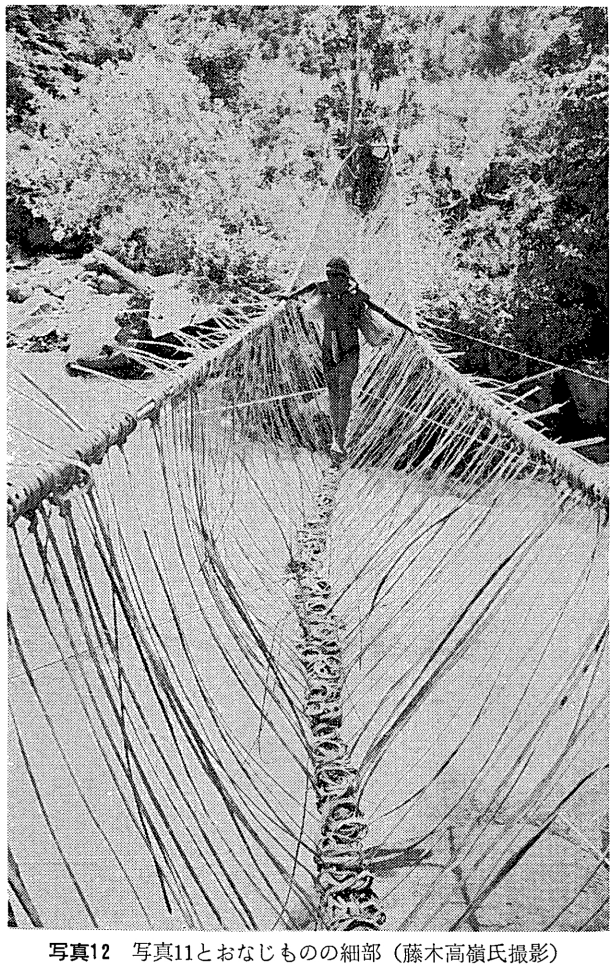


写真12　写真11とおなじものの細部（藤木高嶺氏撮影）

張る籐はいずれも数本を束ねて用いる。右側の手がかりとなる籐束をかたく結んだ籐の1本が下へのび，足をのせる籐束を巻いたのち，同様にして左側の手がかりの籐束と一緒に輪状に編みこまれる。この輪状の部分が足がかりとなる。手がかりと足がかりのあいだをつなぐ籐は両側ともに約15cm間隔でつながれる。

束ねかた，編みかたなどの細部にわたる技術的な資料はない。下を流れる激流に気をとられて，橋を渡るのがようようであり，またキャラバンに使用した多数の人夫を橋の際で統率したりする仕事に追われ，記録をするいとまがなかったのである。

左右の手がかりの部分の要所に結びつけた長い籐が岸の左右の立木とのあいだを引っぱっている。左右の手がかりのあいだを開いておくためのしかけである。

文　献

Doble, M., 1960, *Kapauku—Malayan—Dutch —English Dictionary*, Koninklijk Instituut voor Taal—, Land—en Volkenkunde.

Haddon, A., & J. Hornell, 1937, "*Canoes of Oceania*" Vol. 2, Bernice P. Bishop Museum Special Publication 28.

Hitt, R., 1962, *Carnibal Valley*, Harper & Row.

本多勝一・藤木高嶺，1964，『ニューギニア高地人』朝日新聞社。

石毛直道，1973，「解説：ニューギニア高地人の背景」，『ニューギニア高地人』（本多勝一著）すずさわ書店。

石毛直道，1976，「Kumupa の塩——イリアン・ジャヤ中央高地の物質文化(1)」，『国立民族学博物館研究報告』1巻2号。

Le Roux, 1950, "*De Bergpapoea's van Nieuw-Guinea en hum Woongebied*" Vol. 3. E. J. Brill.

Pospisil, L., 1958. *Kapauku Papuans and their Law*, Yale University Publications in Anthropology No. 54.

清水潤三，1975，「日本古代の船」『船』（大林太良編）社会思想社。

安江安宣，1973，「丸木船」『山陽新聞』1973年2月26日夕刊（京都大学生物誌研究会編『西イリアン中央高地』1976年刊行予定に再録）。

安江安宣，1975，『西イリアン中央高地の生物相』（手稿）。

凌純声，1968，「中国古代與印度太平両洋的戈船考」『民族学研究所集刊』第26期。